

原著

日中看護学生の抑うつと その関連要因に関する国際比較

A comparative study of depression and related factors between
Japanese and Chinese nursing students

小山 智史^{*1} 竹尾 恵子^{*1} 田中 高政^{*1} 宮地 文子^{*1} 陳 錦秀^{*2} 龐 書勤^{*2}

Tomonori Koyama, Keiko Takeo, Takamasa Tanaka, Fumiko Miyaji,
Chen Jinxiu, Pang Shuqin

キーワード：看護学生, 抑うつ, ストレス, 日本, 中国

Key words : nursing students, depression, stress, Japan, China

Abstract

In our previous research, we observed that stress, depression, social support, and self-esteem were closely related to each other. The primary purpose of the research presented here was to evaluate the “self-esteem,” “depression,” “social-support,” and “stress” of Japanese and Chinese nursing students and make comparisons between them. The second purpose was to examine the relationships among these factors. Findings revealed that about 45.6 % of Japanese and about 67.5 % of Chinese students have experienced depression. The scoring of “depression” and “stress,” however, was found to be higher in Japanese students than in their Chinese counterparts. The “self-esteem” scores of Chinese students was higher than that of Japanese students. The score of “social-support” for Japanese students was slightly higher than that of Chinese students. Chinese students, however, tend to have higher self-esteem yet lower social support than Japanese.

要旨

本研究の目的は日本と中国の看護学生に「自尊感情」「抑うつ」「ソーシャル・サポート」「ストレス」に関する質問紙調査を行い、日中の看護学生の抑うつとそれに関わる要因について分析、比較することである。その結果、抑うつの既往に関して、日本の学生の5割弱、中国の学生の7割弱が経験していた。「抑うつ」「ストレス」に関して、日本の学生の方が中国の学生よりも得点が有意に高かった。「自尊感情」に関して、日本の学生より中国の学生の方が高かった。「ソーシャル・サポート」に関しては日本の学生の方が中国の学生より高い傾向が見られた。

*1 佐久大学 Saku University School of Nursing

*2 中国福建中医薬大学 FUJIAN UNIVERSITY TRADITIONAL CHINESE MEDICINE

I. はじめに

看護学生は学内での演習や病院での実習など、緊張を強いられる学習が多い。またカリキュラムも過密で他学部の学生に比べて学習上のストレスも多いと思われる。先行研究では看護学生は臨地実習中、強いストレスを感じているという(加藤, 他, 2005; 樋之津, 他, 2007; 近村, 他, 2007)。ストレスは抑うつの大きな誘因であると報告されているが(Ross, et al., 2005)、看護学生を対象にした抑うつに関する研究、特に、国際比較調査はあまり見られない。国際比較によって各国看護学生の抑うつの状況や関連要因が観察でき、その特徴、共通性が明らかになり、学生の抑うつの早期発見や適切な対応等について検討することができると思われる。

我々はアメリカのKent州立大学のDr. Rossと抑うつとその関連要因について国際共同研究を行った。既に日本の看護学生について、既存尺度を用いて、「抑うつ」「ストレス」「ソーシャル・サポート」「自尊感情」との関係について質問紙調査を行い、関連の分析を行っている(田中, 他, 2010)。

今回は同様に、中国の看護学生についても質問紙調査を行い、日中の看護学生の抑うつとそれに関わる要因について、比較分析を試みた。その結果、日本と中国との相違点や共通点が明らかになったのでここに報告する。

II. 研究の目的

本研究は以下の3項目を目的にしている。

1. 学生の「抑うつ」「ストレス」「ソーシャル・サポート」「自尊感情」に関する各々の自己評価尺度中国語版の作成。
2. 作成した4つの自己評価尺度を用いて、中国の看護学生を対象に調査を実施。
3. 日本、中国の看護学生の比較を行い、日中のそれぞれについて、その特徴や共通点を

分析する。

III. 方法

1. 中国語版質問紙の作成

先行研究で使用した日本語版「看護学生の抑うつに関する調査票・質問紙」(田中, 他, 2010)を中国語に翻訳した。質問紙の信頼性と妥当性を図るため、中国共同研究者らとバックトランスレーションを実施した。更に、中国の看護大学教員数名にプレテストを行い、中国語質問文に修正を加え、「抑うつ」「ストレス」「ソーシャル・サポート」及び「自尊感情」の測定尺度中国語版質問紙とした。

2. 調査対象

中国A大学看護学部看護学生を対象とした。なお、比較対象の日本の看護学生は、田中らと共に2008~2009年に調査した586名を対象とした(田中, 他, 2010)。

3. 調査期間

2011年2~3月

4. 調査方法

基本的な研究手法は、既に倫理審査を経ているが、本調査では、中国を、新たに調査地として追加したものである。中国を追加調査対象としたのは、中国福建中医薬大学に共同研究者が得られたことが大きな動機ではあるが、同じアジア圏にある近隣国において、看護を学ぶ学生の状況を知り、今までの国際比較に更に比較国を加えることにより、研究の広がりを得る上で有益であると考えたからである。また、中国の看護教育が日本と類似していること、看護教育の大学化が進んでいる状況(康, 2007)も類似しており、学生の状況等を比較したいと考えた。また、中国側もこの比較研究に参加することに極めて熱心であった。

調査の実施に際しては、中国共同研究者により、調査対象者に調査について紙面で説明した後、自記式質問紙を配布した。回答結果は留置きにより回収した。質問紙を930部配布し、867部の回答を得た（回収率93.2%）。

5. 倫理的配慮

調査対象者へ質問紙を配布する際に、紙面及び、口頭で自由意思に基づく参加協力であること、対象者は学生であるため参加・不参加によって成績等への影響は全く無いことを説明した。質問紙の表紙には研究目的、プライバシーへの配慮、データの取扱方法、学会や論文で発表する可能性があること、回答はいつでもやめたいときにはやめられること等を明示し、質問紙の提出をもって調査への参加同意とみなした。

6. 調査内容

質問紙の調査内容は以下のとおりである。

1) 基本属性

性別、年齢、学年、入学動機、抑うつ既往

2) 質問内容

①抑うつ尺度（DSC中国語版）：

Radloffによる20項目の尺度を翻訳。得点は0点～60点。高得点になるほど抑うつ状態が強いことを示す。

②ストレス尺度（PSC中国語版）：

Levensteinらによる30項目の尺度を翻訳。得点は30点～120点。高得点ほどストレスを強く感じていることを示す。

③ソーシャル・サポート尺度（SSC中国語版）：

Zimetらによる12項目の尺度を翻訳。得点は12点～84点。高得点ほどソーシャル・サポートが多いことを示す。

④自尊感情尺度（SEC中国語版）：

Rosenbergによる10項目の尺度を翻訳。得点は10点～40点。高得点ほど自尊感情が高いことを示す。

7. 分析方法

日本と中国の看護学生の調査結果を基本属性、抑うつ尺度得点、ストレス尺度得点、ソーシャル・サポート尺度得点、自尊感情尺度得点について、国別、学年別および学年間で χ^2 検定、t検定、Tukey検定を用いて比較分析した。統計学的分析にはIBM SPSS Ver.19を使用した。

IV. 結果

1. 日中看護学生の基本属性

日中看護学生の男女比は日本が男性66名（11.3%）、女性516名（88.7%）、中国が男性42名（4.9%）、女性816名（95.1%）であった（表1）。

日本の看護学生（以後、日本の学生とする）の平均年齢は20.12（SD ± 2.62）歳、中国の看護学生（以後、中国の学生とする）の平均年齢は21.15（SD ± 1.33）歳であり、中国の学生の方が有意に高かった（t検定 $p < 0.01$ ）。日本の学生の学年分布は、1学年が179名、2学年が290名、3学年が106名、4学年と記したものが1名あった。中国の学生の学年分布は1学年が264名、2学年が190名、3学年が203名、4学年が163名、5学年が25名であった（表1）。

入学動機（重複回答可）についてみると、日本では、「ひとを助けることができるから」が237名（40.4%）と最も多く、「確実に仕事に就きたいから」が228名（38.9%）と続いた。中国では、「確実に仕事に就きたいから」546名（63.0%）が動機の1位であり、2位は「ひとを助けることができるから」224名（25.8%）であった。日中学生の入学動機1位、2位について、 χ^2 検定を実施したところ、有意差が見られた（ $p < 0.01$, 表1）。即ち、中国学生は「確実に仕事に就きたいから」が日本に比べて有意に多く見られた。

抑うつの既往についてみると、日本の学生

表1 対象者の基本属性

	日本看護学生		中国看護学生		有意差
性別					
男性	66人	11.3%	42人	4.9%	
女性	516	88.7	816	95.1	
在籍学年					
1年	179人	31.1%	264人	31.2%	
2年	290	50.3	190	22.5	
3年	106	18.4	203	24.0	
4年	1	0.0	163	19.3	
5年			25	3.0	
入学動機(重複回答)					
「ひとを助けることができるから」	237人	40.4%	224人	25.8%	χ^2 検定 p<0.01
「確実に仕事に就きたいから」	228	38.9	546	63.0	

表2 日中中学生の抑うつ経験の有無 (n=1416)

	日本看護学生		中国看護学生		χ^2 検定
	人数	%	人数	%	
あり	262	45.6	568	67.5	p<0.01
なし	313	54.4	273	32.5	
合計	575	100.0	841	100.0	

表3 日中看護学生の抑うつ・ストレス・ソーシャルサポート自尊感情の平均得点比較

	日本看護学生		中国看護学生		t検定
	人数	平均値±標準偏差	人数	平均値±標準偏差	
抑うつ	559	21.20± 9.60 点	752	19.87± 8.10 点	p<0.01
ストレス	562	78.13±17.03	751	71.62±13.74	p<0.01
ソーシャルサポート	581	65.13±13.78	835	63.36±12.86	p<0.05
自尊感情	572	22.90± 4.56	799	27.60± 3.55	p<0.01

は262名(45.6%)、中国の学生では568名(67.5%)が経験しており、中国の学生の方が抑うつ経験者が有意に多かった(χ^2 検定 p<0.01, 表2)

2. 「抑うつ」「ストレス」「ソーシャル・サポート」「自尊感情」の4尺度による、日中看護学生の比較

「抑うつ」「ストレス」「ソーシャル・サポート」「自尊感情」の4項目について、t検定により日中間の比較をした。

「抑うつ」では、日本の学生は平均21.20

(SD ± 9.60) 点、中国の学生は19.87 (SD ± 8.10) 点となり、日本の学生の方が抑うつレベルが有意に高かった (t検定 p<0.01, 表3)。Radloffによる「うつ状態」判定のCut off point 16点以上について (Radloff, 1977)、日本の学生は659人中402人(71.9%)、中国の学生は752人中530人(70.5%)となり(表4)、両国とも約70%の学生が、「うつ状態」と判定される。

「ストレス」については、日本の学生は平均78.13 (SD ± 17.03) 点、中国の学生は71.62 (SD ± 13.74) 点であり、日本の学生の

表4 日中のうつ状態にある学生の割合

うつ状態	日本看護学生		中国看護学生	
	人数	%	人数	%
あり	402	71.9	530	70.5
なし	257	28.1	222	29.5
合計	659	100.0	752	100.0

表5 日中看護学生の抑うつおよびストレスの学年別平均得点比較

	日本看護学生		中国看護学生		t検定
	人数	平均値±標準偏差	人数	平均値±標準偏差	
抑うつ					
1学年	174	19.86 ± 9.22 点	219	16.92 ± 6.52 点	p<0.01
2学年	273	21.95 ± 9.65	161	21.22 ± 8.26	ns
3学年	103	21.38 ± 9.82	185	22.50 ± 8.43	ns
ストレス					
1学年	173	75.42±17.26	228	65.88±11.66	p<0.01
2学年	280	79.42±16.59	162	77.55±15.17	ns
3学年	100	79.25±17.16	178	75.19±12.82	p<0.05

方が有意にストレススコアが高かった (t検定 p<0.01, 表3)。

「ソーシャル・サポート」に関しては、日本の学生は平均65.13 (SD ± 13.78) 点、中国の学生は63.36 (SD ± 12.86) 点であり、日本の学生の方が「サポート」が高い傾向がみられた (t検定 p<0.05, 表3)。

「自尊感情」に関して、日本の学生は平均22.90 (SD ± 4.56) 点、中国の学生は27.60 (SD ± 3.55) 点であり、中国の学生の方が自尊感情は有意に高かった (t検定 p<0.01, 表3)。

次いで、日中学生を学年別に「抑うつ」、「ストレス」について比較した。

1学年では日本の学生の「抑うつ」の平均は19.86 (SD ± 9.22) 点、中国の学生は16.92 (SD ± 6.52) 点で、日本の学生の方が「抑うつ」のレベルが高かった。

1学年の「ストレス」については、日本の学生の「ストレス」の平均75.42 (SD ± 17.26) 点に対し、中国の学生は65.88 (SD ± 11.66)

点であり、日本の学生が有意に高かった (t検定 p<0.01, 表5)。

2学年では日中学生間に差は見られなかった。

3学年の「ストレス」に関して日本の学生は79.25 (SD ± 17.16) 点に対し、中国の学生は75.19 (SD ± 12.82) 点で、日本の学生の方が高い傾向が見られた (t検定 p<0.05, 表5)。

次に国別、学年別に「抑うつ」、「ストレス」に関して、一元配置分散分析、多重比較 Tukey 検定を行った。分析にあたり、日本の学生の4学年と中国の学生の5学年は他の学年と比して母数が少ないため、分析から除外した。

日本の学生については「抑うつ」に関して、学年間に有意差は見られなかった。「ストレス」に関しては1学年に比して2学年で上昇傾向が見られた (p<0.05, 表6)。

中国の学生の場合、「抑うつ」に関しては、1学年に比して2学年、3学年で有意に高くな

表6 日中看護学生における抑うつおよびストレスの学年間平均得点比較

	日本看護学生		中国看護学生		
	人数	平均値±標準偏差	人数	平均値±標準偏差	
抑うつ		点		点	
1学年	174	19.86 ± 9.22	219	16.92 ± 6.52	** *
2学年	273	21.95 ± 9.65	161	21.22 ± 8.26	
3学年	103	21.38 ± 9.82	185	22.50 ± 8.43	
4年生			147	19.18 ± 8.37	
ストレス					
1学年	173	75.42±17.26	228	65.88±11.66	** *
2学年	280	79.42±16.59	162	77.55±15.17	
3学年	100	79.25±17.16	178	75.19±12.82	
4年生			147	69.63±12.78	

(注) Tukey検定 *: $p < 0.05$ **: $p < 0.01$

っていた ($p < 0.01$, 表6)。また、4学年は3学年に比して有意に低下していた ($p < 0.01$, 表6)。しかし、1学年と比べれば4学年は、2、3学年同様、「抑うつ」スコアは高い傾向が見られた ($p < 0.05$, 表6)。

「ストレス」についても、1学年より2学年、3学年が有意に高くなっていった。また、2、3学年に対し4学年では有意に「ストレス」スコアが低下していた。 ($p < 0.01$, 表6)、しかし、1学年に比べれば、4学年も、2、3学年同様、有意に高い傾向が見られた ($p < 0.05$, 表6)。

V. 考察

1. 日中看護学生の特徴

男性看護学生の比率は日本で11.3%、中国で4.9%といずれも男性が少ない。日本医師会による報告書では、看護系大学に入学した男性看護学生の比率は、1997年は4.1%、2006年は10.2%と増加しているとしている(日本医師会医療関係者対策委員会, 2008)。今回の調査で、日本の男性看護学生の割合は2006年時点の比率とほぼ同率であった。今後とも増加する可能性がある。中国での男性看

護師数や男子学生数の推移については資料がなく、今後を予測することが難しい。

2. 入学動機の比較

日本の学生は「ひとを助けることができるから」が40.4%と1位であり、中国の学生は25.8%と低かった。「確実に仕事に就きたいから」という理由では日本の学生は38.9%で、中国の学生は63.0%と高く、確実な就職に中国の学生は強い動機を持っていた。

日本の場合、入学の動機の1位「人を助けることができるから」(40.4%)と2位である「確実に仕事に就きたいから」(38.9%)の差が少なかった。中谷らの看護学部進学動機の調査によると、看護学生は「手に職をつけたかったから」、「就職に困らないから」、「収入が安定しているから」、「人の役に立ちたかったから」という理由で約8~9割を占めるとしている(中谷, 他, 2006)。日本の学生は、看護師は免許があり、職が確実に得られる、看護に携わることで「ひとを助けることができる」という両方の思いが大きな入学動機のようなのである。

中国の場合、登坂によると、1980年代

中頃までは政府が大学生の就職先を決定し、「エリート」として就職先が保障されていた。しかし、1999年にこの制度が廃止され、就職選択も市場原理が働くようになったという（登坂, 2007）。昨今、報道されている、中国において、大学を卒業しても、就職が難しいという事情を見ると（江渕崇 2010-3-13, 中国ニュース通信社 Recode China 2010-2-19）、就職率が100%の看護大学への入学動機として高くなっているのであろう。

3. 「抑うつ」「ストレス」に関する比較

「抑うつ」について、今回の調査では Radloff が開発した尺度を翻訳し用いた。Cut off point として、得点が16点以上を「うつ状態」としている（Radloff, 1977）。日本の学生、中国の学生とも、平均点で見れば、この基準（Cut Off Point）を超えて「うつ状態」と判断されるレベルであった。また、実数で見ても Cut off point 16点以上の学生の比率は両国とも約70%とほぼ同じであった。

抑うつ症状の経験者の比率を見ると、日本の学生の場合、45.6%に対し、中国の場合、67.5%とかなり高く、中国の看護学生では「抑うつ」症状経験者は日本より多く存在していた。

一方、日本と中国の看護学生の「抑うつ」スコアの平均値を見ると、日本のほうが高くなっており、スコアでは逆転が起こっているが理由は判然としない。

孫の大学生を対象とした、両親の「過度の期待」と青年の「抑うつ」に関する日中比較研究を見ると、中国の両親は日本の両親よりも学生に対する期待が高いが、中国の学生は日本の学生よりも抑うつ傾向は低かったという。今回の中国の学生の場合も、親の高い期待とストレスフルな学業との板ばさみにあって、うつ症状を経験しているものの、スコアから見れば中国の学生のほうが「抑うつ」が低いという、孫の研究と同じ結果が見られ

たのかもしれない。今後、更に分析を深めていく必要がある。

「ストレス」については、Levenstein らが開発した尺度を翻訳し使用した。この尺度は分析にあたり、(調査素点 - 30) / 90 の公式を使い、0~1に指数化し評価することとしている（Levenstein et al., 1993）。このように指数化することにより、分散が補正され、異なる母集団との比較がしやすくなる。しかし、本研究では、Dr. Ross との共同研究で、素点で比較評価を行ってきた。従って今回の報告では素点による比較を行った。ちなみに指数化して検討した結果においても、分析結果に変動はなかった。

本研究において日本の学生は「ストレス」尺度の指数化後、平均は 0.53 ± 0.19 、中国の学生は 0.46 ± 0.15 であった。Levenstein らの英語あるいはイタリア語を母国語とする大学生 193 人に対する調査では、平均 0.37 (SD 不明)、Berggors のスウェーデン一般成人 122 人に対する調査では、平均 0.22 ± 0.12 (Berggors, 2006)、Kocalevent らの 16 歳以上のドイツ人 2483 人に対する調査では 0.30 ± 0.15 であった (Kocalevent et al., 2011)。これらの結果と比較すると、日中学生の指数平均値は高く、看護学生は一般人よりも「ストレス」が高い状態にあることが示唆される。

日中の学年別の比較では、1 学年を除いて「抑うつ」「ストレス」とも日中間に得点の有意差はなかった。1 学年については、中国の学生は「抑うつ」「ストレス」共に日本の学生より有意に低く、全体としてみたときに中国の学生のほうが「抑うつ」「ストレス」共にスコアが低いという傾向と同様であった。

国別の学年間比較では、日本では「ストレス」については、1 学年に比して 2 学年で高くなる傾向がみられた。中国においては「抑うつ」「ストレス」ともに 1 学年に比して、2 学年、3 学年が有意に高くなっていた。

このような傾向は、看護学生の場合、2学年で実習が本格的に始まり、学生が「ストレス」をより感じていることが原因かもしれない(加藤, 他, 2005; 樋之津, 他, 2007)。日本の場合、「抑うつ」に関して、学年間で差異が認められなかったのは、日本の調査対象学生の2学年の一部が、まだ実習が始まっていなかったため、このような結果となった可能性がある。

「ソーシャル・サポート」の得点に関して、日本の学生の方が中国の学生より高い傾向が見られた。「ソーシャル・サポート」が高い日本の学生は、周囲からのサポートをより多く受けて、抑うつ経験が低くなっているとも考えられる。日本と中国の大学生を対象にした青年の甘えに関する研究では、日本の学生の方が中国の学生よりも「甘え」が有意に強いという(篠原, 他, 2003)。日本の学生は周囲に甘え、自発的に「ソーシャル・サポート」を求め、結果的に抑うつ経験が少なくなっているとも考えられる。

4. 「自尊感情」に関する比較

「自尊感情」に関して、日本の学生より中国の学生の方が高かった。中国では大学生であることそれ自体による「自尊感情」の高さによるものか、あるいは看護職の位置づけによるものか、文化的差異、価値観の差異か今後の研究が必要であろう。

5. 研究の限界と研究課題

今回、「抑うつ」や「ストレス」、「ソーシャル・サポート」や「自尊感情」などを測定、比較することで日中看護学生の共通性や差異が見えてきた。しかし、差異をもたらしている背景としてのより深い分析が不十分であったと思われる。今後、中国の共同研究者とともに、より分析を深めていく必要がある。また、4尺度の相互関係について、パス解析等を用いて更に分析を進めたいと考えている。

VI. 結論

- ・「自尊感情」「抑うつ」「ソーシャル・サポート」「ストレス」に関する自己評価尺度中国語版を作成し、調査を実施した。
- ・日中の学生間に入学動機に差が見られた。日本の学生は、「ひとを助けることができるから」、「確実に仕事に就きたいから」という点に同程度の動機があり、中国の学生は「確実に仕事に就きたいから」という動機が多かった。
- ・抑うつの既往についてみると、日本の学生は262名(45.6%)、中国の学生では568名(67.5%)が経験しており、中国の学生の方が、抑うつ経験者が有意に多かった。
- ・日本の学生は、中国の学生に比して、「抑うつ」「ストレス」に関するスコアの平均値が高かった。
- ・日本の学生に比して、中国の学生の方が自尊感情が高かった。
- ・ストレスと抑うつについてみると1学年に比して2、3学年では、それぞれ高くなっていた。

謝辞

この研究は、平成22年度文教協会研究助成金により、援助を受け実施した。関係各位に深くお礼申し上げます。

文献

- Bergfors, C. (2006). Perceived stress related to aspects of self image in normal adults. Umeå University Department of Psychology. Course D thesis, spring term 2006, 1-16.
- 近村千穂, 小林敏生, 石崎文子, 蒼井聡美, 飯田忠行, 山岸まなほ, 他(2007). 看護臨床実習におけるストレスとコーピングおよび

- 性格との関連. 広島大学保健学ジャーナル. 7 (1), 15-22.
- 中国ニュース通信社Recode China (2010-2-19). <就職難>今年の大学新卒予定者は630万人! 年末就職率目標は80% - 中国. Recode China ホームページ. <http://www.recordchina.co.jp/group.php?groupid=39783>; (2011/10/16)
- 江溯崇 (2010-3-13). 大卒の就職内定率、最悪80% 高校生も低迷81.1%. asahi.com ホームページ. <http://www.asahi.com/job/2011/news/OSK201003130085.html>; (2011/10/16)
- 樋之津淳子, 林啓子, 村井文江, 高島尚美 (2007). 臨地実習における看護学生の気分変化と自律神経反応との関連. 札幌市立大学研究論文集. 1 (1), 31-34.
- 加藤亜由美, 樋口マキエ (2005). 臨地実習における看護学生のストレスとその対処法. 九州看護福祉大学紀要. 7 (1), 5-13.
- Kocalevent, D.R, Hinz, A. Brähler, E., & Klapp, B. F. (2012) Determinants of fatigue and stress. BMC Research Notes, 4, 238 from <http://www.biomedcentral.com/1756-0500/4/238> (2012/1/10)
- 康鳳英 (2007). 中国における看護教育と課題. 石川看護雑誌. 4. 65-69.
- Levenstein, S., Prantera, C., Varvo, V., Scribano M., Berto, E., Luzi, C., & Andreoli, A. (1993). Development of the perceived Stress Questionnaire: A new tool for psychosomatic research. Journal of Psychosomatic Research, 37. 19-32.
- 中谷信江, 木戸久美子, 林隆 (2008). 山口県立大学看護学部学生の進学動機について. 山口県立大学紀要. 10, 15-19.
- 日本医師会医療関係者対策委員会 (2008), 平成18・19年度医療関係者対策委員会報告書「看護職員の不足・偏在とその対策について」.
- Radloff L.S. (1977). The CED-D Scale : A self-report depression scale for research in the general population. Applied population, Applied Psychological Measurement. 1, 385-401.
- Ross R., Zeller R., Srisaeng P., Yimmee S., Somchid S, Sawatphanit W.(2005). Depression, stress, emotional support, and self-esteem among baccalaureate nursing students in Thailand. International Journal of Nursing Education Scholarship, 2 (1), article25.
- 篠原しのぶ, 原崎聖子 (2003). 青年の甘えと社会的適応に関する教育心理学的研究II : 日本・中国学生の比較を中心に. 福岡女学院大学紀要. 人間関係学部編. 4, 29-35.
- 孫逸舒 (2010). 両親の過度の期待と青年の抑うつ傾向 - 日本と中国における比較研究 -. 人間文化創成科学論叢. 13, 237-245.
- 田中高政, 竹尾恵子, 七田恵子, 小山智史, 羽毛田博美, 塚田縫子 (2010). 抑うつとその関連要因に関する研究 - 第1報: アセスメントツール (日本語版) の検討 -. 佐久大学看護研究雑誌, 2 (1), 15-28.
- 登坂学 (2007). 中国における高等教育普及と就職難. 九州保健福祉大学研究紀要. 8, 35-44.